

# 碧 水

第 11 号

昭和 57 年 6 月

静岡県水産試験場

〒425 焼津市小川汐入3690

電話 <05462> 7-1815

## 浮 魚 礁 の 技 術 開 発 試 験

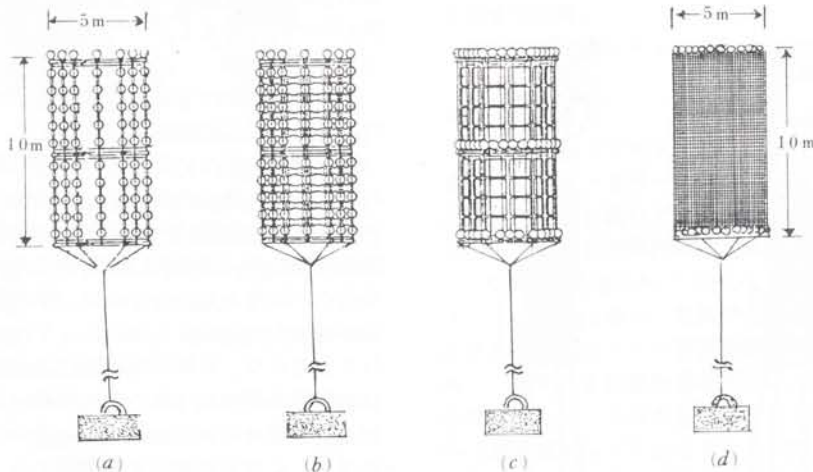
200 カイリ時代に対応するため、我が国周辺域の漁業生産の増大が急務とされています。このため近年沿岸漁場の整備開発事業により大規模な各種の漁場造成事業が進められていますが、その中の有力な方法の1つである魚礁について、新たな技術開発の期待が生れています。それは従来の着底式の沈設魚礁では、設置水深が50~60m以浅域と限界がありますので、これより深い100~200m海域まで漁場造成を拡大することができないかということです。

このため、当場では、昭和53年度から水産庁の委託を受け海洋の中層に構造物を設置して回遊性魚類を集魚することを目的とした浮魚礁の技術開発試験を行っています。

### 1. 浮魚礁の実例と開発試験の進め方

カツオ・小型マグロ類等回遊魚は漂流物に付くという習性を利用して明治・大正時代から青竹等をわら縄で結束した浮体を人工的に作成し、これをいかりで固定しシイラ等、表層性回遊魚を集合させ漁獲している実例があります。昭和40年代に入って各県水産試験場ではコンクリート魚礁上部域、あるいは海の中層に構造物を設置して集魚効果を高めようとする試験が行われています。静岡県では、昭和47年網代地先の並型魚礁（コンクリートブロック）上部にシーアンカーを敷設し集魚効果試験を行ったのが始まりです。

浮魚礁の技術開発は新しく始まった研究で未知の分野が多いため、試験海域は設置後の調査



第1図 昭和53年~55年大井川沖に設置した浮魚礁

a: 昭和53年 b: 昭和54年 c,d: 昭和55年

が効率的に行えること、漁業者の協力を得やすいこと、気象、海象条件に対してもある程度厳しく、さらに船舶の航路障害や操業による事故の起りにくいこと等を勘案して検討されました。その結果、大井川沖を選定し昭和53年～55年の3カ年間試験を行いました。

56年以降は、大井川沖での試験実績をもとに試験海域を大井川沖より波高が高く、かつ流速の速い環境条件の厳しい海域、更に将来の遠州灘漁場開発との関連も考慮し、浮魚礁の対象となる回遊性浮魚類の多い御前崎沖に移して浮魚礁の耐久性、集魚性について調査を行っています。

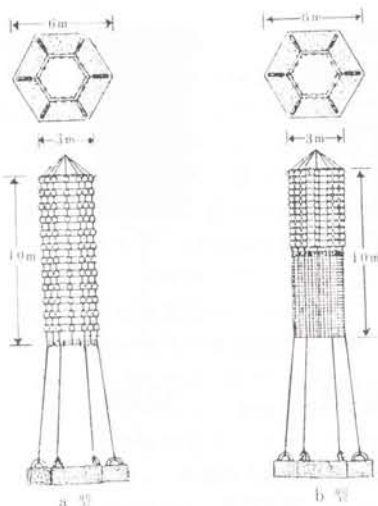
## 2. 浮魚礁の形状と集魚効果の事例

### (1) 大井川沖浮魚礁

浮魚礁の形状は、直径5m、高さ10mの六角筒状になった海中構造物（第1図）を水面下30m層と50m層にいかり1基で係留し、設置層、魚礁の構造、魚礁単体と集合体等の違いによる魚の集魚性と施設の耐久性等について調査を行っています。

### (2) 御前崎沖浮魚礁

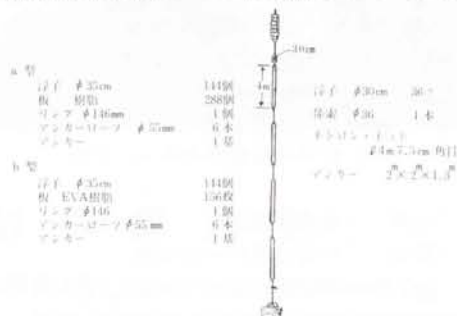
56年度御前崎沖設置の浮魚礁は、耐久性を特に考慮し、直径3m、高さ10mの構造物に係留索6本をいかり（コンクリートブロック最大径6m）で固定しました（第2図）。また、57年度は安全性を特に考えロープ式（ロープに直径60cm程度のジャコゴを取り付け）（第3図）を基本に集合体での集魚性について試験を行います。



第2図 昭和56年度設置した浮魚礁

### (3) 集魚効果の事例

浮魚礁の効果については設置場所及び対象魚種によって異なりますが、鳥取県では浮魚礁に集魚したブリ類をまき網で漁獲しています。また、高知県室戸沖の浮魚礁では、曳縄により56年10,11月集中的にヨコワが漁獲されています。



第3図 昭和57年設置予定浮魚礁

100万円以上の水揚げした船が6隻もみられたなど、ヨコワの集魚で漁業者の関心が高くさらに浮魚礁の設置希望があるようです。

本県においては大井川沖でシラ、メジ、カツオ、イナダ、シラスが断片的に漁獲されましたが量的に少なく目立った漁はみられていません。また、御前崎沖では設置後の経過日数が少ないのでまだ生産にむすびづくに至っていませんが、釣獲試験でヒラマサ（1.5kg）、マハタ（0.6～2kg）が釣獲されたり、潜水艇“はくよう”でもこれら魚種を確認しています。また、本年4月の魚探調査では、魚礁上部、周辺、海底域の3か所に大型魚の反応が認められ、今後期待がもたれています。

### 3. 今後の問題

浮魚礁の開発はまだ緒についたばかりで、検討を要する多くの問題点があります。

(1) 安全性について………現在各県で設置されている浮魚礁の係留方法は大半が1点係留です。係留索の強度は一般に荷重の10倍の安全強度を採用しているために係留索そのものを切断することは考えられませんが、浮魚礁本体の一部が破損したりすることによってロープ類に撓りを生じたり、不測の事故等によって浮魚礁本体が海面を漂流して航行中の船舶、あるいは沿岸に打ち寄せられて被害を与えることが予想されます。これら事故防止の対策として事故が起きた場合自動的に沈む自沈装置の取り付けが考えられますが、これも完全なものでなく自沈装置と連結するロープの摩耗等による切断、ある

いは延縄、刺網等漁具の絡むような時には障害となる場合も考えられます。

(2) 耐久性について……現在の浮魚礁の設置層は魚礁の上端で20～30m層に浮かしていますが、年月の経過とともにアカフジツボ、ムラサキイガイ等、付着生物が非常に多くなり水中重量で1m<sup>2</sup>当り5～10kgの荷重が推定されています。そのために浮魚礁の余剰浮力がなくなり極端な例では海底に着底してしまいます。また、付着生物は表面積の増大により、流速、波力に対し抵抗力の増大を引き起しますので、今後浮魚礁の設計に当っては耐久性に十分配慮する必

要があります。

(3) 設置海域の選定について……浮魚礁の対象魚種は今のところブリ類、カツオ、メジ、シイラ、サバ類、イワシ類、アジ類等回遊性浮魚類を主体に考えていますので、これら魚種の漁場形成の状況、海況的には外洋系水の流入状況、魚群補給状況等を検討し、設置海域を選ぶ必要があると考えています。

いずれにしても、浮魚礁の効果についての検討結果は、近々のうちにとりまとめてお知らせしてゆきたいと思っております。

(沢田貴義)

## サクラエビ増殖対策協議会開催される

6月18日に、昭和57年度のサクラエビ増殖対策協議会が当场で開催されました。

この協議会は、昭和55年に発足したもので、東京大学海洋研究所の青山先生や東水大の大森先生をはじめとし、サクラエビ漁業関係者や水産課、栽培漁業センター、水産試験場の職員によってつくられているものです。

今回の協議会では、昭和56年の調査研究の成果と57年度の計画について話し合いがなされましたので、それらの概要をまとめてみました。

### 昭和56年度の成果

#### 生態調査

##### 1. 分布密度の評価に関する研究

(1) サクラエビを含む動物プランクトン層の分布は水平的にはほぼ200m以浅の海域にみられた。また鉛直的には日没直後から上昇し、夜間は30m以浅の層に分布し、薄明時に下降した。

季節的な差異については水平的にはあまり見られないが、鉛直的には冬期にやや深層に分布しているようである。

(2) 科学魚探で測定したSV値(平均体積乱強度)からサクラエビの分布密度(尾/m<sup>3</sup>)を評価した。

分布密度を比較するとSV/T.Sの方がネット採集の結果より1～2桁高い値になっている。

##### 2. 漁獲努力量の標準化

(1) 45年頃から漁具の改造が加えられ始め漁法は揚繰網方式から船曳網方式へ変り、漁獲性能は著しく向上している。

(2) 50年以降の資源水準は45年以前の約 $\frac{1}{4}$

に低下し特に54年級群は $\frac{1}{10}$ 以下に低下した。

(3) 45年以前では春漁の漁獲割合が大きかったが、近年(50年以降)では漁獲の圧力が秋漁に偏り、また漁獲努力量の増加がみられている。

#### 生物調査

##### 1. 産卵期調査

(1) 湾奥部の由比～富士川沖の産卵調査によると産卵は6月に始まり、10月にほぼ終了した。

(2) 卵の出現ピークは7月下旬にみられ、6月下旬から8月下旬にかけてかなりまとまった卵の出現があった。

(3) 卵の出現は周期性がみられ、月令と関連があるようである。

(4) 卵の地理的分布の重心は焼津沖から徐々に清水沖～沼津沖へと移る傾向がみられた。

(5) 総産卵量は15～16兆粒程度であった。

##### 2. 漁期中の生物調査

資源水準の高い49年級と低水準の55年級とを比較すると55年級は春漁期に平均モードよりやや小さいが特に目立った変化はなかった。

49年級は翌々年の春漁まで出現している。

#### 環境調査

##### 1. 海洋環境把握

(1) 流れの時間変動の検討はアンディラー型流向流速計を用い測定した。

##### 解析項目

i) 調和分解 ii) 自己相関関数 iii) エネルギースペクトル iv) 相互相関関数

(2) 海況の短期変動

(3) 短期変動の実態及びその変動要因



## ふ化飼育試験

### 1. 水温

産卵は15～27℃の水温範囲において大差はないがふ化試験では18～24℃で産卵し、21～24℃でふ化した区は他の区より高いふ化率を示した。

幼生飼育試験では21℃以下と24℃以上では生残率に2倍以上の差がみられた。

### 2. 塩分

産卵時の塩分濃度は3.1%以上が必要と思われる。

### 3. 餌料

サクラエビ幼生が摂餌し始めるのはエラフォカリスI期からであり、初期餌料として小型の動物プランクトンも捕食するが、主餌料は植物性プランクトンと思われ、また摂餌量も成長に従って増加している。

## 漁場環境の改善調査

### 1. アルコール発酵母液（AMT）のサクラエビ幼生の生残率に及ぼす影響

(1) 1～5 ppmの濃度のときにやや生残率が他の区に比べて高いように思われた。

(2) 6日後の生残率をみると0.3～1 ppmの区で高かった。

## 昭和57年度の計画

### 生態調査等

#### 1. 分布密度の評価に関する調査研究

(1) 科学魚探、漁具を用いた魚群量測定（特に比較試験）

(2) 群の変動様式の把握

日周移動、四季別日周変動

(3) 標的強度の測定

#### 2. 駿河湾サクラエビ資源と隣接海域資源との関連

#### 3. 漁具漁法の検討

## 生物調査

### 1. 産卵期調査

(1) 総産卵量からみた資源量の推定（56年級について）

昭和56年と同様に湾内を8ブロックに分けて調査

(2) 卵・幼生の鉛直分布と環境層別採水による餌料生物クロロフィル量、物理環境との対比

(3) 環境変動期（遠州灘沖大冷水塊出現前後49・51年）を対象にサクラエビ卵・幼生の分布・出現量変化の検討

2. 雌雄別・海區別体長組成の変化からみた資源動向の検討

3. 捕食魚による資源量への影響調査

## 環境調査

1. 環境条件（水温、塩分、濁度）と群の分布特性の検討

2. 海洋環境と資源変動との関連の検討

## ふ化飼育試験

### 1. 餌料試験

幼生の摂餌量を知る目的で3種類の餌料（珪藻、ワムシ、アルアンメ）を用いてエラフォカリスI期以降について調査

### 2. 幼生飼育試験

幼生の長期飼育

## 漁場環境の改善調査

### 1. 飼育

サクラエビ幼生をAMT海水との接触時間を変えて飼育し、その生長について調査

### 2. AMT

(1) 漁場への投入方法

(2) 漁場での拡散状況

(3) 投入による生物・化学的環境の変化

(4) サクラエビに与える影響

## 適正漁獲量の検討

総合的な面から検討する

（山田信夫）

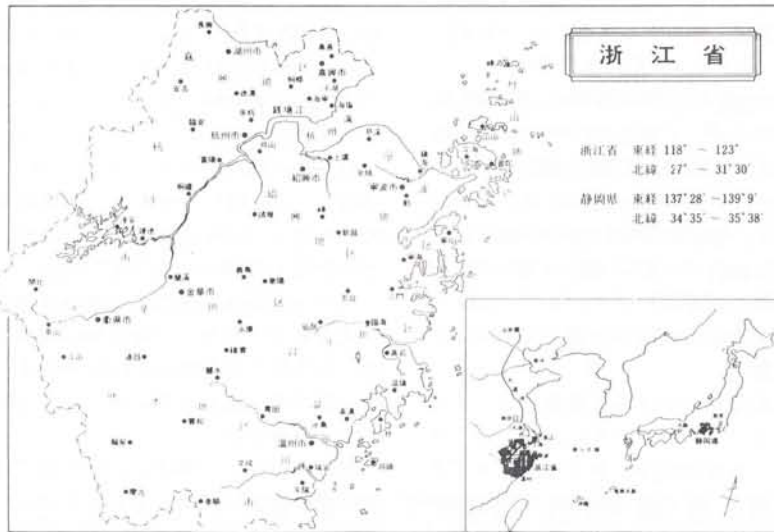
# 中国浙江省の漁業事情

今回、県漁業協同組合連合会の主催による中国浙江省の漁業事情調査に事務局として参加させていただきましたので、調査結果の概要を簡単に報告いたします。なお、本報告は県漁連が印刷した「中国浙江省漁業事情調査報告書」の要約ですので詳細は参照して下さい。

まず調査団は、高木和夫県漁連会長を団長と

し、齊藤治郎左衛門県信漁連会長、松村錠一県水産加工連会長、佐野昭司県農水部長等本県の水産の生産、流通加工業界の13名の代表者で構成されました。

目的は、本年4月に締結された本県と中国浙江省との友好関係を、さらに実りあるものとするため、水産業の面からも、浙江省と本県で互



いに協力し合うことができるかどうかをあらかじめ調査することでした。

幸い、浙江省水産庁長を始めとする浙江省側の皆さんの協力により、浙江省水産業の概要を知ることができました。

私達が訪ねた浙江省は図に示したように日本から比較的近く、成田から飛行機で約3時間で行けるところにあります。

## 1. 漁業生産の組織

### (1) 組織

浙江省の漁業従事者数は約20万人で、家族を含めた漁家人口は70万人です。これらの漁業従事者のうち5%が国営漁業に従事し、95%が民間です。民間の組織は1隊200人程度の“生産隊”が基盤となり、これが集合して“生産大隊”となりさらに上部組織として“漁業公社”があります。この漁業公社が性格的には我国の漁協に相当するものと思われませんが、その構成員数は、小さなものでも3千人、大きなものでは2～3万人にも及びます。

一方、行政組織としては、浙江省水産庁が水産行政全体を統括し、この下に地区水産局、県水産局が設置され、公社の指導を行っています。水産公社は、公社が生産部門を担当するのに対し、流通・輸出入を担当する機関で、我国の公団、事業团的性格を有するものと考えられます。

### (2) 経営の実態

公社以下の生産隊及び生産大隊が、生産部門を担当しますが、その年の生産量は前年の12月に目標があらかじめ定められます。生産量の

約50%は国に買いとられますが、買いとり価格はその他の一般消費物価とのバランスを考慮して国が決定しています。これらの価格は相当長期間安定的なものとして定められることとなっていて、現在の価格は1978年に定められたものです。

国に買いとられた残りの50%は、生産隊ごとに自由に市場で販売することができ、これらの自由販売分は鮮度の良いこともあって国の販売分より高い値段で取り引きされているといわれます。

国の買いあげ、市場での販売により得られた金額の50%は生産経費に、20%が将来の投資のための積み立てに、残りの30%が漁業者の所得になるということでした。なお不漁時の場合の漁家の最低保障は国で行い、不足分の財源は国が補てんしています。

## 2. 漁業種類と漁獲の実態

### (1) 生産量

浙江省の総漁獲量は、年変動はあるが大略80万トンを超え、中国全土の18%強で、水産省として重要な地位を占めています。

このうち海面漁業は、舟山、寧波、温州の3大漁業基地を中心として、省水産業の主力をなし、約85%にあたる60～70万トンの漁獲量をあげています。また長い海岸線を利用した浅海養殖等の海面養殖での漁獲量は、全体の5%にあたる3.5～4万トン程度あります。一方、古くから盛んな淡水養殖、淡水漁業等の内水面漁業の全漁業に占める比率は我国より高く、全

体の10%に当る7～8万トンとなっています。

### (2) 漁船

浙江省全体の漁船は、約3万隻で、漁業従事者が20万人ですので、1隻当りの平均乗組員数は約6.5人です。1954年から動力漁船の導入が始まり、最近ではその比率が40%に達していると言われますが、漁船の規模は50トン未満がほとんどで、国営漁船の一部に100～300トン型のトロール漁船があるのみです。また、設備も国営船を除いては極めて簡単なものだそうです。

### (3) 漁獲魚種

浙江省の海面漁業における主要魚種は、タチウオ、フウセイ（ニベ科：グチに近似、但しグチより大型で、体長は50cmに達する）、キグチ、コウイカの4種で、この4魚種で全生産量の40%に達しています。その他の魚種では、ウマヅラハギ、サワラ、ヒラ、マナガツオ、サバ、ハモ、アジ、カレイ類、ワタリガニ、エビ（アキアミ）と種類も豊富です。

このうちトロールでは、キグチ、フウセイ、タチウオ、ウマヅラハギ、イカ類が漁獲され、流し刺網では、サワラ、ヒラ、ワタリガニ等が漁獲され、さらにサバ、マルアジ、イワシ等の浮魚類は、まき網で漁獲されています。

漁獲の時期は、春はタチウオとウマヅラハギ、夏はフウセイ、キグチ、イカ、マナガツオ、ヒラが主な漁獲物で、秋になると一般漁船は休みに入り、船・漁具の修理を行います。冬にとれる主なものはタチウオです。

浙江省の内水面漁業生産量の75%は、草魚、青魚、ハクレン、コクレンで占められています。これらはいずれもコイ科で、養殖池・貯水池・河川及び湖沼の囲い込み養殖池で養殖され、人工採卵も行われています。残りの25%は、コイ、フナ、ライ魚、ウナギ、ボラ、淡水エビ、淡水

カニ、カラス目、シジミ、タニシ等様々の種類があり、鮮度良好なこれらの淡水魚介類は中国では貴重な蛋白源です。

### 3. 流通加工

#### (1) 船上処理

船上での処理については、急速冷凍のできる能力を持っているのは国営船のみで、一般の船は氷を持っていくとのことでした。

またこの場合、国内用と輸出用は漁獲段階から区別することとし、輸出用の漁獲を行う船には、あらかじめ事前にその旨を伝え、品質を高度に保つよう指示しているとのことでした。

#### (2) 冷蔵施設

冷蔵庫を有する漁港は、浙江省では37カ所で、現在の庫腹量は省全体で1.8万トンです。また凍結能力は2千トン/日です。冷蔵温度の平均は-18℃で、凍結温度は-25～-30℃です。

#### (3) 加工

水揚げされ仕分けされた魚は、冷蔵庫に直接入庫され、鮮魚冷凍品としてかなりの部分が流通されますが、冷蔵庫に併設されている加工場で一次加工処理もされます。すなわち輸出用のコウイカやエビの頭・内臓除去処理を行い、ムキイカ・ムキエビの凍結品を製造したり、タチウオの塩蔵品やウマヅラハギの塩干品も製造されています。特に塩蔵品は重要で全体の30～40%に達していると言われています。

以上浙江省の水産業の概要について述べましたが、今後の両省県の友好・協力を一層深めるためには①中国での立ち遅れの目立つ漁撈技術・加工処理技術に対する協力、あるいは増養殖・栽培漁業技術の交流等の技術協力及び交流。②中国で需要の少ない魚種（マルアジ等）の加工原料としての輸入促進とその資源量、品質の詳細な調査等が今後必要と考えられます。

（和田 卓）

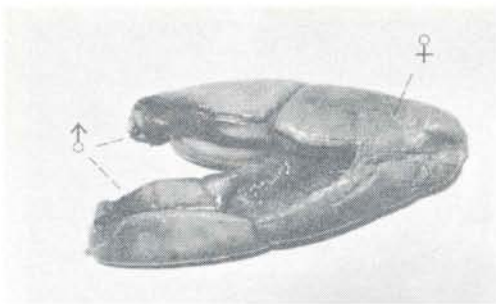
## あれ？このカツオ雄かな雌かな

西伊豆町田子で、かつお節を製造している伊山本伊助さんが、原料のカツオを切っていたところ、写真のような卵巣と精巣を持ったカツオが発見されました。山本さんは、かつお節作りはじめて40年以上になるそうですが、こんなカツオは見たことはないと言うことで、このほど当場に調べてくれるよう依頼がありました。

調べてみますと、たしかに写真右半分は卵巣で左半分が精巣という雌雄同体であることがわかりました。重さは約130gでした。

このカツオ、残念ながら身の方はかつお節になった後でしたが、山本さんの話では外見上他のカツオと全く変わったところはなかったそうです。また産地なども4月中旬に焼津港に水揚げされたという以外は不明ですが、ともかくめずらしいものなので、當場で標本として展示する予定です。





## 水産試験場公開デー

当場では、創立80周年を機に、水試の業務を漁業者だけでなく一般県民に理解してもらうとともに、魅力ある水産の将来像について考えるため、「明日の水産をめざして」をメインテーマに、公開デーを開催することになりました。

日時は、7月30、31日（金、土）の2日間で、午前10時から午後4時までです。



展示については、水試80年のあゆみ、試験研究業務、展示室の開放、新しい水産機器類、明日の水産、地場特産品、小中学生の絵画展、富士丸、駿河丸の船内公開などを計画しています。また、加工連の方々による即売や漁協婦人部連合会や消費者グループの方々によって「ふれ合い試食会の集い」をも催し、魚食普及を図っていきたくと考えております。

その他、カツオ、マグロ漁業に関する映画の上映や、水産全般に関する相談コーナーも設けることとしています。

夏の暑いときでもあり、交通の便も良くないところではありますが、是非御来場下さい。

（山田）

## 漁況・海況

### ● 海況

6月下旬の黒潮の動きをみると、遠州灘沖では大型冷水塊の南縁沿いに31°N付近を東流した後、伊豆列島線東側を北上して犬吠崎近海に達している。この流域内の水温は昨年同期より1～2℃低目である。

### ● 漁況

#### シラス船曳網

4月下旬後半からマシラスよりカタクチシラスに変わったシラス船曳網漁は、その後5月に入ってやや漁獲量水準が低下したものの、中旬までは遠州灘西部海域を中心に1日1カ統当り200～500kg前後と、近年の低水準の中では比較的まとまった漁況であった。

下旬には100～200kg前後の水準になったが、5月の県下主要6漁港での水揚量は、771トンを示し、前年（342トン）の約2.3倍となった。また、5月の1日1カ統当り漁獲量も前年（129kg）の約2倍の250kgとやや上向きの傾向を示した。しかし、漁場は遠州灘西部海域が中心で、駿河湾内での漁況は不振であった。

#### サクラエビ船曳網

5月のサクラエビ漁は、10日の出漁で584トンと昨年同期（206トン/10日）の2.8倍の水揚であった。資源量はやや上向きの傾向を示しているが、今期の漁獲量が増えた一つの要因として操業時間が長かったことも考えられ、資源水準は依然低いレベルにあることを注目する必要がある。

漁場は湾奥部の田子の浦～由比沖にみられた。

#### サバたもすくい

伊豆諸島海域でのマサバを対象とする“たもすくい漁”は、5月一杯ではほぼ終漁した。例年より2カ月以上遅れて4月24日から漁期が始まり、5月末までの県内の推定水揚量は3,700トンと56年（21,300トン）の1/6、55年（55,800トン）の1/15と極めて低調であった。これは、近年太平洋系のマサバ資源が減少傾向にあり、特に、本年の産卵親魚群の中心となる3年魚の出現も少なく、全体の親魚来遊量水準が近年の内でも低かったためと考えられた。また、来漁期以降漁獲対象となる55、56年級の未成魚も資源量水準は低いと推定されるので、今後漁況が急速に回復することは考えられない。

## ふ化飼育試験

### 1. 水温

産卵は15～27℃の水温範囲において大差はないがふ化試験では18～24℃で産卵し、21～24℃でふ化した区は他の区より高いふ化率を示した。

幼生飼育試験では21℃以下と24℃以上では生残率に2倍以上の差がみられた。

### 2. 塩分

産卵時の塩分濃度は3.1%以上が必要と思われる。

### 3. 餌料

サクラエビ幼生が摂餌し始めるのはエラフォカリスI期からであり、初期餌料として小型の動物プランクトンも捕食するが、主餌料は植物性プランクトンと思われ、また摂餌量も成長に従って増加している。

## 漁場環境の改善調査

### 1. アルコール発酵母液（AMT）のサクラエビ幼生の生残率に及ぼす影響

(1) 1～5 ppmの濃度のときにやや生残率が他の区に比べて高いように思われた。

(2) 6日後の生残率をみると0.3～1 ppmの区で高かった。

## 昭和57年度の計画

### 生態調査等

#### 1. 分布密度の評価に関する調査研究

(1) 科学魚探、漁具を用いた魚群量測定（特に比較試験）

(2) 群の変動様式の把握

日周移動、四季別日周変動

(3) 標的強度の測定

#### 2. 駿河湾サクラエビ資源と隣接海域資源との関連

#### 3. 漁具漁法の検討

## 生物調査

### 1. 産卵期調査

(1) 総産卵量からみた資源量の推定（56年級について）

昭和56年と同様に湾内を8ブロックに分けて調査

(2) 卵・幼生の鉛直分布と環境層別採水による餌料生物クロロフィル量、物理環境との対比

(3) 環境変動期（遠州灘沖大冷水塊出現前後49・51年）を対象にサクラエビ卵・幼生の分布・出現量変化の検討

2. 雌雄別・海区别体長組成の変化からみた資源動向の検討

3. 捕食魚による資源量への影響調査

## 環境調査

1. 環境条件（水温、塩分、濁度）と群の分布特性の検討

2. 海洋環境と資源変動との関連の検討

## ふ化飼育試験

### 1. 餌料試験

幼生の摂餌量を知る目的で3種類の餌料（珪藻、ワムシ、アルアンメ）を用いエラフォカリスI期以降について調査

### 2. 幼生飼育試験

幼生の長期飼育

## 漁場環境の改善調査

### 1. 飼育

サクラエビ幼生をAMT海水との接触時間を変えて飼育し、その生長について調査

### 2. AMT

(1) 漁場への投入方法

(2) 漁場での拡散状況

(3) 投入による生物・化学的環境の変化

(4) サクラエビに与える影響

## 適正漁獲量の検討

総合的な面から検討する

（山田信夫）

# 中国浙江省の漁業事情

今回、県漁業協同組合連合会の主催による中国浙江省の漁業事情調査に事務局として参加させていただきましたので、調査結果の概要を簡単に報告いたします。なお、本報告は県漁連が印刷した「中国浙江省漁業事情調査報告書」の要約ですので詳細は参照して下さい。

まず調査団は、高木和夫県漁連会長を団長と

し、齊藤治郎左衛門県信漁連会長、松村錠一県水産加工連会長、佐野昭司県農水部長等本県の水産の生産、流通加工業界の13名の代表者で構成されました。

目的は、本年4月に締結された本県と中国浙江省との友好関係を、さらに実りあるものとするため、水産業の面からも、浙江省と本県で互